



今月は、長崎平和推進協会から交流証言者の久家 江光子（くが えみこ）先生を招聘して、被爆者の方から継承した体験談と交流証言者として活動している先生の思いをお話していただきました。

【被爆者 田川 博康さんの被爆体験】

昭和20年8月9日、当時、田川さんは12歳、自宅は鳴滝。爆撃機 B29 の音を聞き、空を見てみると、白い落下傘が見え、すぐに空がオレンジ色になった…。ものすごい爆風、家の中はめちゃくちゃ、タンス、食器棚が壊れた。両親を待っていたが、帰ってこない。8月11日、両親が働いていた浦上の様子を出会った上半身やけどを負った男の人に聞いたが「浦上はなか。」と言う。8月12日、両親を探しに浦上に向かった。長崎駅には死体がゴロゴロ。たどり着いた茂里町の風景は異様だった。三菱の工場も完全に崩れ、父がいるはずの工場には誰もいなかった。ふと、防空壕から「ひろちゃん」と自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。母の声だった。ほっとした。「お父さんは？」と聞くと、けがをしていた。父を滑石の救護所に運び、手術をしてもらった。でも、父は亡くなってしまった。母はけがはなかったが、間もなく母も亡くなってしまった。

時が過ぎて77歳のとき、父の手術に立ち会った看護師さんと出会った。その時のことを尋ね、詳しい話を聞いて、心残りがとれた。それをきっかけに、原爆のことを話すことを決めた。自分も何か役に立つことがあるのではないか、と思えるようになった。田川さんは、平和な世の中が続くことを願いながら、昨年、87歳でお亡くなりになった。

【田川さんの交流証言者として活動する久家先生の思い】

長崎で生まれ育ち、原爆のこと、平和のことを伝えていかなければならないという気持ちを持つようになった。自分の身内に被爆した者はいないけれど、何か自分にできることはないかと、と考えているときに、長崎平和推進協会の「家族・交流証言者募集」のチラシを見た。「君以外のひとりの人に、平和の思いを伝えてほしい。」と田川さんにお話を聞いたときに託された思いを引き継ぎ、7年前に交流証言者となり活動を始めた。

平和とは、家族や友人を大切にすることから始まる。城山小学校の皆さんに受け止めてほしいことは、「自分の足元をしっかりと見て、一人の人はいないかな？悩んでいる人はいないかな？」と感じることの大切さ。そして、平和の思いを家族や友人に伝えてほしい。今日感じたことを伝えてほしい。ピースナビで自分たちの思いを伝えてほしい。自分の思いを伝えるときは、「初めて自分の話を聞く相手だ。」と意識して丁寧に話すことが大切である。失敗を恐れずに、自信と誇りをもって思いを伝えてほしい。

最後に、これからの決意と久家先生へのお礼を込めて、「子らのみ魂よ」を歌いました。久家先生、ありがとうございました。